

Title	モドカシイ タイワ サンカフェ ト イウ ココ ロミ カラ
Author(s)	金, 和永
Citation	臨床哲学のメチエ. 17 p5-p.8
Issue Date	2011-10-15
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10608
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

もどかしい対話

— 「さんかふえ」という試みから

金 和永

「さんかふえ」* という対話実践が、とよなか国際交流協会で行われている。対話コンボ*はその場を設定するのを手伝い、また一部は参加者としても関わっている。

参加の対象となるのは協会の職員とボランティアを中心に、対話コンボからも数名。2ヶ月に一回、オレンジショップでコミュニティボールを使った対話を行う。その裏の月でも、「ミニさんかふえ」と銘打って国際交流センターのスペースを使って対話を行っている。

「さんかふえ」という対話の場は、ことさらに哲学に振り向けられているわけではない。むしろこれは協会の活動の一環として、協会に携わる人たちの交流や、今後の活動に活かすことの出来るような何かを生み出すことが期待されたものである。しかしそれでも、対話が哲学的になることもあるし、哲学的ではない対話であっても、哲学的対話を行う際に大切になってくるような対話のある側面が際立ってくることもある。「哲学的」という看板がない

からといって、「哲学的でない」のではない。私は「さんかふえ」の経験から、大切な対話の側面のほんのわずかな部分を描いてみようと思う。

ある回で、協会活動の広報をどうするかという話題が出たことがある。媒体や時期など、かなり具体的な方法の話へと対話は向かっていった。この時、協会職員をはじめとして、幾らかの人はもどかしさを感じていた。私もその一人である。実際、広報活動の方法を考えることについては既に別の場を設けて話し合いが行われていたから、ここでもその

話をするというのは無駄ではないか。方法の話に終始してしまえば、わざわざコミュニティボールを使い、特別に場を設けて話すことの意義がないのではないか。「さんかふえ」という対話の場への期待ゆえの、もどかしさである。

しかし、対話が終わるところになると私は「なんとかあった」という思いを抱いていた。終了後の簡単な振り返りで、職員の方のいくらかもそのように感じたらしいとわかった。この「なんとかあった」は重要である。これは、対話の経験へのある種の満足を表現しているからだ。しかし、対話への満足とは何なのか。もどかしさは満足とど

のような関係にあるのか。

対話に参加した人の対話への手応えは、まずはその人自身の対話の場に対する期待や不安といった心境、対話への漠然とした目的意識などによって左右されるものだ。これらの要素は確かに重要である。職員の方や私のもどかしさも、ここから発するところは大きい。対話への手応えに、予め対話者の期待や対話の位置づけは関わってくることは確かである。

しかし、次のようにも考えられる。対話の場に期待しているということが対話のなかで表立って私に現れてくる時には、既に私はその対話から一歩身を引いているのではないだろうか。なぜならこの視線は私と、まさに私が今参加している対話の場との関係への視線だからである。私は何か期待していたようには進まない対話に居合わせている。この場はなんなのか。私はこの場にどう関わっているのか。この場に居て私は何をすることが出来るのか—明確にこれらの問いが意識されていることはないにしても、対話へのもどかしさはこれらの問いに繋がっている。もどかしさは、私がどのように対話の場に参加していけるのかという、私と対話の場との関係の問題を含んでいるのだ。

このような対話への参加のモードと対比できるようなものとして、「対話にのめり込んでいる」モードを考えてみよう。対話にのめり込んでいる場合、自分自身の期待や対話の目的などを考えることはあまりない。私ではない人の話を聴きながらその思考に沿い、共に考える。その時私は私自身と対話との関係を考えられるほどの余裕を残してはいられない。要するに、対話への期待や不安といった、対話の場と私との関係への視線が対話のさなかに生まれている時、私は対話に参加しつつも、「のめり込んでいる」時とはどこか違うモードで居合わせているのだ。



私に対話を振り返って「なんとなかった」と感じたことは、私が抱いていたもどかしさが消えたこととして考えられるだろうか。そうかもしれないが、それは予め私が持っていた期待に、対話が沿うようになったという意味ではない。そのように考えてしまえば、対話者の意図と期待のみが対話の

場の満足を左右し、予測不可能な対話はすべて不満足な結果に終わってしまうだろう。そうではない。むしろ私は、対話の中で自分の期待や不安を忘れたのである。私はもどかしさを忘れて、他者の思考に身を委ねる。もどかしさが消えるということは、私の意図したとおりに物事が進むことではない。だから、対話が予測不可能であるからといって、決してその対話が満足なものにならないのではない。他者の思考に私がとらわれるときにこそ、対話は予測不可能なのだ。だとすれば、対話の予測できなさもまた、対話への満足を生む可能性を大いに持っている。

対話の場と自分自身との関係という問題は対話へのもどかしさとして現れる。もどかしさは一概に無くされるべきものではない。例えばごく単純な例として、この視点は、行われている対話の方向性への問いとして場に投げられることがありうるだろう。違ったモードを絶えず行き来しながら私たちは対話に参加するのであって、そのどちらかがどちらかよりも絶対的に望ましいということはない。とはいえ、十分に対話に参加できているとは言えないような状況に、ある人が置かれているがゆえのもどかしさがあることも、また事実だ。

ある回の「ミニさんかふえ」が終わった後、協会でボランティアをしている大学生に感想を聞いたことがある。彼女は対話の内容自体には満足していたらしい。だが、「自分の考えを言って良いかわからず、何も発言できなかった」と漏らし、「何も発言できなかった」ことに心残りを感じていると話してくれた。

発言する、それはある形で、否応なく私を曝すことである。彼女のもどかしさは、彼女と対話との関係における、自分を曝すことへの抵抗を示しているのではないだろうか。たしかに、抵抗は常に存在する。それでも対話の場で私が自分自身の経験から語り出し、私の思考を提示することが出来るのは、対話の場が私を促してくれているからに他ならない。少なくとも、私がその対話の場で対話の参加者として認められ、その意見の正当性や真偽とは無関係に、曝されることになるだろう私が認められていること。それを対話者が感じられることが必要ではないか。これを対話の場における「安心」と呼んでもよいかもしれない。このような基本的な安心は、もどかしさ自体にも関わっている。安心できない対話において、参加者はどうしようもなく自身と対話の場との関係について考えさせられ、それにとらわれてしまう。つま

り、対話への参加のモードが固定されてしまう。このような場合、対話はなかなか満足のいくものにはならないだろう。

「さんかふえ」は、月に一回というペースで定期的に対話の場を設けている。一回きりの対話で生み出すことは難しいような安心を、繰り返すことによってゆっくりと実現していく。対話の場が繰り返され継続されることの大きな意味はそこにあるのではないだろうか。安心のもとでこそ対話への満足は生まれるのだろうし、曝される私が

認められているという実感のもとでこそ、もどかしさも対話を豊かにしうるのだ。

(きむ ふぁよん)

注

* **さんかふえ**：財団法人とよなか国際交流協会が主催する事業で、ボランティアの積極的な協会活動や運営への参加を促進することを目的とする「デザイン5」という事業のうちの一つ。これまでの活動の概要は「プロジェクトの報告」、特に「3. さんかふえーとよなか国際交流協会」を参照。

* **対話コンボ**：こちらについても、上述の報告を参照。

